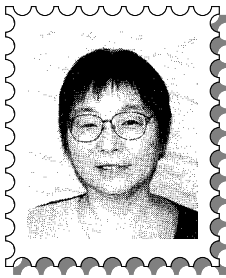


## 日本語補習校も30周年



カナダ・サスカトゥーン市在住

高谷 尚子



閉鎖回避のため教室利用を勧誘されている学校

北方圏センターが今年創立30周年を迎えると聞きました。思えば、私が「北方圏」(旧誌名)に寄稿し始めたのも1978年ですので、これまた30年の月日が流れました。1976年にカナダに移住、我が家の居間で寺子屋式に始まったサスカトゥーン日本語補習校も正式に登録されて今年で30周年です。

当時はわが子も含めて、永住は未定の日本人家族がかなりあって就学児を抱える有志4夫婦が交代で教師役を勤めました。2年間の実績を作り当時の文部省に援助を求めて許可され、その証書を持って、当地の教育委員会に交渉し、校舎の無料借用にこぎつけました。10年後の1988年には、カナダの多文化保護政策が成文化され、同じ言語を話す子女が15名いと伝承言語学校を開設でき校舎の無料使用が許可されました。最古の日本語学校を含めて、現在28ヵ国が開校しています。

当時は帰国子女教育援助が目的でした。日本からの資金援助の占める割合も大きいので永住者が増えて帰国子女が減少している近年は運営も憂慮されていましたが、日本国籍をもつ永住者子女も資金援助の対象になってホッとします。国際結婚組の子女たちは殆ど日本国籍も獲得しており、また学齢期前の子どもが多数いるため、開校以来初めて幼児部を創設しました。



学芸会での幼児部のこどもたち

日本語学校は9月から6月末の10カ月ですが、その間、学芸会と運動会の行事があります。先日、その学芸会が催されて、多くの幼児たちも、日本の童謡を楽しく披露してくれました。

新興住宅地に子育て中の若い世代が集中し、逆に古い区域の少子化が進んでいます。生徒数が減少している小学校の校長は閉鎖を阻止するために地域活動の場に提供しています。生徒数によって教員数が決まりますので、教員数の確保の為に近所に小学校のない新興住宅地の生徒に入学してもらおうと通学バスの斡旋や勧誘巡りをするのも校長の役目です。それでも在校生数減少は防ぎようもなく開校50-60周年の小学校のいくつかは私の勤める難民移民補助機関にまで教室の提供を勧誘してきました。

カナダは移民難民をもっと増やして産業を発達させようとしてい

ますので、その予算も増えていきます。新移住者の英語教育のためのクラスも増え、わが機関も超満員です。私の「親」教室も勧誘先の小学校に移転を勧められています。託児所と送迎つきの親教室ゆえ、今しばし頓挫しています。ここでは障害者と健常者の教室は併設されていますし、いきなり、大人の移民難民とその子らが外部から入学?して、従来の学校の秩序はどうなるのかと心配です。校長や父兄は秩序よりも学校閉鎖を重要視して奔走しています。多民族や老若男女が同居して出来る限り共存共栄しようとしています。が、やむなく閉鎖に追い込まれた学校は、コミュニティー・センターとして、常駐託児所や成人学級などに利用されています。わが機関も、手狭なら、どこかを買い取るというのですが、NGOはお金があっても買う事はできないのです。